

国際大会で結果を残す職人の共通点 仕事への意識向上が優勝の近道に

前回、世界で働くフリーランスについてお話ししました。今回は、そんな職人たちも参加している、ラッピングの競技大会について、私自身の経験に沿って話をしていきたいと思います。

世界中の貼り職人が集う数々の国際大会

現在、世界規模で開催している大会は主に3つ。世界各地で予選を行い、名実ともにNo.1のラッパーを決める「World Wrap Masters」、アメリカで開催され、看板へのシート貼りや即興デザイン能力などを含めた総合力を競い合う「Wrap Olympics」、ドイツで行われる世界国別対抗戦の「Nations Wrap Cup」です。今回は、上記2つの大会について深掘りしていきたいと思います。

まず、「World Wrap Masters」は、FESPAというシルクスクリーンの世界的な団体が運営しているコンテストです。年間で、ヨーロッパをはじめとするユーラシアや、アフリカなど、さまざまな地域で大会を行っています。

そして、昨年11月に初めて日本大会を開催したタイトルでもあります。私が会長を務めさせていただいている一般社団法人日本カーラッピング協会とのパートナーシップにより、実現にまで至りました。これらの地方大会でトップを獲ると、「World Wrap Masters Finals」という世界大会に出場でき、その優勝者は、世界チャンピオンとしての栄誉を与えられます。

私はこのヨーロッパ大会に2016年から4年連続で出場し、アジア大会にもその翌年から2年連続で参加しています。手前味噌ですが、2018年にはFinalsにまで進み、世界4位という結果を残しました。

次に「Wrap Olympic」です。同大会には、2017年から3年連続で出場しています。幸い、2018年は優勝、2019



① 2018年の「Wrap Olympics」で優勝した筆者
②③国際大会では一般的な貼り作業のほか、用意されたお題に沿ってラッピングする即興のデザイン力も求められる
④時にはほかの職人とペアになって協力し合うケースも。写真は、2019年ワールドチャンピオンのブルガリア人・IVAN氏と筆者



年は2位という成績を収められました。このほか、ロシアで行われた大会では審判としても、2016、2017、2019年に携わっています。

それぞれの大会でメインとなる競技種目は、リ出力した粘着フィルムでのカーラッピング。また、例えばヘルメット、マネキン、イスなどその場で発表されるお題に対し、用意されたフィルムでラッピングする即興デザインも競技内容に含まれます。貼りの技術はもちろん、施工スピードと耐久性も必須。そのほか採点基準になるのは、清掃的確認できているか、フィルムは折れていないか、端部に浮きやしわがないか、表面にゴミはないかなど、普段クライアントからチェックされる部分です。日々の業務姿勢がそのまま高得点につながります。

近年では、カッターの使用を認めないケースや、たとえ使っても、車両に少しでも傷をつけた場合は即敗退になるなど、道具を扱う際のテクニックを要求するルールも一般化してきました。

早さだけ、きれいさだけといった一芸でなく、ラッピングの総合力が求められる、厳しい大会なのです。

日ごろの業務がラッパーの技術を構築する

これらの競技大会を見てきて感じるのが、若手職人の台頭です。私のような50代の職人が若かりし頃は、看板貼り作業は未開拓の技術でした。上手だと思っ先輩のテクニックを真似てみたり、試行錯誤を繰り返して、我流で職人になった人がほとんどだと思います。

しかし現在は、技術の体系化が進んでいます。世界各地でフィルムメーカー主導の技術講習が行われたり、民間のラッピング講習によって、短期間で的確な技術を学べるようになりました。その結果、世界大会で良い結果を残す若者が、近年急激に増えてきています。特に、日ごろ黙々と作業している、真面目な職人が多く入賞している印象です。

私は大会の上位入賞者と話をする機会が度々あります。その時に皆口をそろ

SAMURAI WRAPPER



昨年名古屋で行われた、「World Wrap Masters Japan」の上位入賞者とスタッフ。日本で開催する初の世界基準によるラッピング競技大会で、優勝者にはヨーロッパで行われる世界大会への出場権利と、往復航空チケット、宿泊費が贈呈された

えて、「毎日行っている仕事と同じラッピングを少し早く作業しているだけだ」と言います。大会を勝ち抜くのに、特別な能力はいりません。毎日着実に、お客様から満足してもらおう貼り方ができれば、それだけで世界に認められるラッパーになれるのです。

彼らに共通している点は、もうひとつあります。それは、飽くなき向上心です。一度でも大会に出場した選手たちは、一様に翌年のコンテストにも出場します。大会で指摘された自身の足りないところを謙虚に受け入れ、ほかの選手の上級テクニックを目で見て学び、それを日ごろの仕事に生かしながら、毎日練習と訓練を行っているのです。

大会では、平等に定められた条件のなかで、いかに課題をこなすかというのが重要になります。これは、クライアントからの無理難題に対し、どう臨機応変に対応するか、というのと非常に似ているのではないのでしょうか。私も数多くの現場で、開店前の店舗や、出走前のレースカーといった、極めて短時間でこ

なさなければならない仕事を任されてきました。もしそこで粘着面にゴミが多すぎると、フィルムもしわくちやなものを納品していたら、後日クレームになっていたでしょう。大会の課題は、仕事における引き出しを増やすのにも役立つと、私は考えています。

大会を勝ち抜く人が、一番上手とは限りません。しかし、上位入賞者は、日々の仕事に高い意識で臨んでいるのも事実です。大会に参加するメリットは、そんな人たちと出会える場を作ったり、技術を直接見られるという部分にもあるのかもしれない。

最後に余談ですが、一般社団法人日本カーラッピング協会では、昨年に引き続き、来年名古屋にて「FESPA World Wrap Masters Japan2021」を開催予定です。今回の話で、少しでも興味を持った読者がいたら、ぜひ大会へ参加してみてください。

今回はコロナ禍において、日本のラッピング市場でできるアプローチ方法について紹介していきたいと思います。

荻谷 伊

(かりや ただし)



1969年2月3日生まれ。89年大学中退後、父の看板業を手伝い始める。07年より、カーラッピング専門のPPF事業部を立ち上げ、車体装飾に注力。日本カーラッピング協会の会長も務める。18年、米・ロングビーチのWrap Olympics 優勝など、数々のラッピングコンテストで活躍する傍ら、世界各地で車体装飾のデモンストレーションを実施。各国におけるサイン製作の現場も積極的に視察し、業界の発展に寄与する活動を続ける。

資格

- ・職業訓練指導員 第10085号
- ・屋外広告士 第7721号
- ・1級技能士 広告美術仕上げ 第14-061-21-0001号
- ・3M Preferred (US 3M本社認定インストーラー)
- ・3M Knifeless 認定インストーラー US0017号
- ・AVERY DENNISON CWI 認定
- ・HEXIS CERTIFIDE INSTALLER GOLD 認定
- ・LLumar PPF JAPAN 認定講師
- ・TWI 認定トレーナー

主な講師、デモンストレーション実績

- 2017年 中・杭州でラッピング講習会
 - 中・上海でPPF講習会
 - 日・SIGN&DISPLAY SHOWでセミナーなど
 - 2018年 日・JAPAN SHOPでセミナーなど
 - 馬・クアラルンプールでPPF講習会
 - 露・モスクワでコンテスト審査員、PPF講師
 - 米・ラスベガスのSEMAショーで実演
 - 2019年 日・沖縄県広告美術協同組合で講習会
 - 尼・スラバヤでのイベントでセミナーなど
 - 露・モスクワでコンテスト審査員
 - 日・SIGN&DISPLAY SHOWでセミナーなど
 - 米・ラスベガスのSEMAショーで実演
 - 2020年 日・日本カーラッピング協会講習会
- ほか多数

SNS

フェイスブック (荻谷 伊)
Instagram @designlab.inc.wrap_japan
Twitter @tadashikariya

株式会社デザインラボ PPF事業部

〒501-6023
岐阜県各務原市川島小綱町 2150-24
TEL/FAX : 0586-89-2332

●企業、団体、個人にかかわらず、カーラッピング、プロテクションフィルムなどについての技術講習会を受付中。小企業の海外展開（販売）の実例を交えた講演会、セミナーの問い合わせもデザインラボまで。